

バーナード・ショーの『聖女ジョウン』における 「もうひとつの奇跡」

飯田 敏博

1. はじめに

バーナード・ショーの友人であった劇作家ウィリアム・アーチャー William Archerは、ショーが「現実的、あるいは象徴的な偉大な戯曲」“a great play, realistic or symbolic”を執筆することを期待していた。「横隔膜を揺さぶるのではなく魂を揺さぶる」“shake the souls of people instead of their midribs”¹⁾ 戯曲の完成を待っていたのである。ショーがジャンヌ・ダルクを主人公にした戯曲『聖女ジョウン』*Saint Joan* (1923)を執筆し、ノーベル文学賞(1925)を受賞したのはその数年後のことであった。アーチャーの言葉がショーにどれほどの影響を与えたかは定かではないが、ショーは大作を完成させ、それ以後、数多の批評を受けることになった。

本論では、『聖女ジョウン』が「勇気を吹き込む者」と「勇気を吹き込まれる者」が織りなす劇であることを示し、その結果、ショーが「ちょっとした奇跡」“a bit of miracle”をなし得たことを明らかにする。

2. 劇の始まり

劇の始まりはどの作品にとっても重要なものである。資料から何を取り入れ、何を捨てるかは作家に任されている。ショーは、『聖女ジョウン』の原典資料としてマレー T. Douglas

Murrayが編集した『ジャンヌ・ダルク、オルレアンの娘、フランスの解放者』*Jeanne d'Arc, Maid of Orleans, Deliverer of France* (1902)を多く使用したと言われている²⁾。

しかし、たとえば、「ジョウンが領主ロベール・ボードリクール Robert Beaudricourt に会ったことはないけれども、お告げの声のおかげで、ロベールであることは認識できた」³⁾ という点についてはショーの戯曲では言及されていない。ショーはおもしろい史実であっても劇の筋と結びつきが弱い時は導入を見送ったようである。その一方で、ショーは第1場に「卵」を巡る「奇跡」を描写した。ジョウンがロベールに面会を申し込み、面会が許可されるまではめんどりたちが卵を産まなかった。けれどもロベールがジョウンに会い、王太子シャルル Charles がいるシノン行きをジョウンに許可した途端、めんどりたちが卵を産み出したというエピソードである。この「卵」に関する件はジャンヌ・ダルク関連資料では言及されておらず、「純粋にショーが天才であることを示すもの」“pure Shavian genius”であるとの評価がある⁴⁾。

戯曲『聖女ジョウン』の冒頭で観客・読者のための説明役を担うのは「賄い方」“steward”である。彼は舞台登場時にはすでにジョウンに勇気を吹き込まれている。彼は主人のロベールに、ジョウンが「否定しがたい」“positive”⁵⁾(83)存在であり、「自分たちに勇気を与えてくれる」“she puts courage into us.”(84)と訴える。

賄い方は強壯な身体のロベールに比べると見る影もない貧相な男ではあるが、領主が与える圧力の中にあってもジョウン擁護の姿勢を崩さない。

ロベールを説得するもうひとりの人物が貴族プーランジェ Poulengyであり、彼もまた、すでに勇気を吹き込まれている。プーランジェは、「娘の言葉と神への篤い信仰心が私に火をつけました」「Her words and her ardent faith in God have put fire into me.」(90)と述べ、ジョウンこそが「正気な者たち」「sane ones」が招いたこの世の惨状を立て直す「狂気の者」「mad people」の一人であると主張する。「奇跡」以外に現状を救うことはできないというのである。しかし、ロベールは「ポリー、奇跡、大いに結構。奇跡で問題なのは近頃とんと奇跡が起きないことだ」「Miracles are all right, Polly. The only difficulty about them is that they dont happen nowadays.」と皮肉を言う。その上で、「あの娘が奇跡を起こせると言うのか」「Oh, you think the girl can work miracles, do you?」と疑問を投げかける。それに対し、プーランジェはジョウン自体が「ちょっとした奇跡」「a bit of miracle」であると応答する。彼は「あの娘には何かがある」「There is something about her.」と感じているのである。神経質なプーランジェが自信家のロベール相手に議論で奮闘する様は、観客の目を引く。第1場ではロベールがジョウンに勇気を吹き込まれ、シノン行きを認めるまでの過程が描かれている。

3. シャルルの変化

第2場では王太子シャルルがジョウンに勇気を吹き込まれる様子が描かれる。宮廷の者たちは、ジョウンが彼らの中に紛れ込んだ本物

の王太子を見つけることができるかどうかで、ジョウンが「天使であるのか、そうでないのか」「whether she is an angel or not」(103)を判定しようとする。ジョウンは王太子に扮しているのが通称「青髭」「Bluebeard」ことジル・ド・レイ Gilles de Raisであることを見破り、本物の王太子も群衆の中から容易に見つけ出す。しかし、ショーは感傷的な「奇跡」を作り上げることはしない。ショーはジョウンが本物の王太子をいとも簡単に見つけ出す合理的な理由を大司教に説明させる。「宮廷内でもっとも貧相で、もっとも服装の趣味が悪い者」「the meanest-looking and worst-dressed figure in the Court」(105)が王太子であることはシノンの誰もが知っているというのである。この場面、神の御声が「神の娘よ、大胆に選べ。」「Daughter of God, choose boldly.」⁶⁾とジョウンを励ますマッケイ Percy Mackayeの『ジャンヌ・ダルク』*Jeanne d'Arc*にくらべるとショーの描写はより現実的である。

ジョウンの真の奇跡はむしろ、第2場の最後に起きる。ジョウンがすばやく王太子シャルルの肩に手を置き、彼に勇気を吹き込む場面である。シャルルは自分の中の「王家の血」「the blood royal」(102)を認識し、「弱虫から可能性をもった指導者への変化」「his change from sickly coward to potential leader」を遂げたのである。ホルロイド Michael Holroydはこの変化と、ショーの「ソニー」SonnyからG. B. S.への「転換」「conversion」とを重ね合わせている⁷⁾。

第2場において印象的な場面がある。ジョウンが、神の祝福と栄光に満たされた大司教との出会いに感動し、大司教に祝福を受けるように願う場面である。自分を前にして感激する純朴な娘の姿に大司教は顔を赤らめ、侍

従長に「もうひとつの奇跡ですね」「Another miracle!” (109) と密かにやゆされた。大司教はジョウンの頭に手をのせ、「娘よ、おまえは宗教に恋をしている」「Child: you are in love with religion.” と言い、そのことで害はないが危険であることを示唆する。ジョウンは大司教に「大司教様は私に大きな力と勇気をお与えになりました」「Oh, my lord, you have given me such strength, such courage.” (110) と感激する。この時点においてはジョウンがもつ「危険」を感知しながらも、大司教もまたジョウンから勇気を吹き込まれていたのかもしれない。

4. デュノアの立場

第3場はオルレアンにおける「風向きの変化」を巡るやりとりが中心となる。「私生児」「Bastard of Orleans」と呼ばれる勇将デュノア Dunois の槍に細長い三角旗が付けられている。その旗は強い東風を受けているため西になびく。彼らはイングランド軍を背後から攻めるために風向きの変化を必要としていた。これがジョウン登場以後に一転して西風になり、東になびくようになる。しかし、風向きの変化はジョウンが教会で十分にお祈りをした後に起こる感動の「奇跡」としては描かれていない。ジョウンが教会に行こうと決め、案内を頼んだ瞬間にあっさりと風向きが変わるのである。デュノアがジョウンに「神様が口をきいてくれた。君こそが王の軍隊の指揮官だ。」「God has spoken. You command the king's army.” (123) と呼びかけることになるが、唐突の感は否めない。第1場、第2場同様、ショーは現象としての「奇跡」の描写で大きな効果は狙っていないかのようである。

物語の展開としては、風向きの変化により、

デュノアのジョウンに対する評価が一変する。しかし、シャルルの時と比べると、デュノアがジョウンによってもたらされた「勇気」は大きなものではない。『聖女ジョウン』においては、オルレアンの場で、ジョウンが兵士を率いる場面もなく、デュノアが勇猛に活躍する戦闘場面もない。デュノアとジョウンは兄妹のような関係である。勇将は「君は戦争に恋をしている」「You are in love with war.” (120) とジョウンを憐れみつつ、兵を率いる時に自分の後ろに兵がついてくるかどうかを顧みないジョウンの姿勢を頼もしく思う。また、デュノアはジョウンの先生でもあり、意志薄弱なロベールやシャルルとは違って、そのせりふが「バーナード・ショー一流の権威の響き」“Shavian ring of authority”⁸⁾ をもつ。彼の存在は劇に落ち着きと安定感を与えている。

アメリカの小説家マーク・トウェイン Mark Twain の『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』*Personal Recollections of Joan of Arc* を読むと、トウェインのジャンヌ・ダルクに対する認識はショーのそれとは大きく違うことがわかる。トウェインの作品中には、「フランス軍のベテランの将校によると、ジャンヌは戦争においてあらゆる面で偉大であったが、もっとも才気にあふれていたのは砲兵隊の位置決めとその扱いにあった」“The veteran captains of the armies of France said she was great in war in all ways, but greatest of all in her genius for posting and handling artillery.”⁹⁾ と、彼女の「戦争の実践家」としての面を取り上げる文章がある。これに対してショーの『聖女ジョウン』においては、ジョウンの「フランス軍が負けてばかりいるのは怪我をしないことだけを考えて戦っているからです。怪我をしない一番の方法は逃げること。フランスの騎士たちは捕虜

の身代金で稼ぐお金のことはばかり考えています。殺すか殺されるかではなくて、お金を払うか、払われるかということになっています。」
 “Our soldiers are always beaten because they are fighting only to save their skins; and the shortest way to save your skin is to run away. Our knights are thinking only of the money they will make in ransoms: it is not kill or be killed with them, but pay or be paid.” (95) というせりふがあるように、ジョウンの「戦争の批評家」としての側面を色濃く描いている。

5. 三者の協議

第4場にジョウンは登場しない。この場は、「ジョウンの主たる敵同士がジョウンとジョウンの危険思想にどう反撃を加えるかについての言葉のフェンシング」“verbal fencing between Joan’s principal opponents over how she and her dangerous ideas are to be countered.”¹⁰⁾に充てられ、ジョウンは議論の対象になっている。フランスのボーヴェイの司教コーション Cauchon とイングランドの伯爵ウォリック Warwick が登場する。ここでの議論はコーションが「教会」全体を代表し、ウォリックが「貴族」全体を代表する。両者とも冷徹な分析能力を持ち、劇の背景となる、「教会とジョウン」、「貴族とジョウン」の構図を明快に説明する。コーションが「プロテスタントイズム」“Protestantism” と呼び、ウォリックが「ナショナリズム」“Nationalism” と呼ぶものは、「普通の人と神の間に聖職者あるいは貴族が介在することに対する一個人の抗議なのである」
 “It is the protest of the individual soul against the interference of priest or peer between the private man and his God.” (139) というこ

と両者の考えは一致している。彼らは現体制を脅かす新参者を許しはせず、自らの利益に関わる問題では冷静さを失い、感情をむき出しにするのである。

この場にもうひとり、イングランドの従軍牧師ストガンバー Stogumber が登場する。彼の「心情の変化」が大きくなぐねりを作り、劇を動かすことになる。ストガンバーはショーの「もっとも靈感を受けた発明」“its most inspired invention”¹¹⁾であるとイタリアの劇作家ピランデロ Luigi Pirandello は指摘する。狂信的に愛国を叫ぶストガンバーは、冷静に合意点を探りあうウォリックとコーションの議論に遠慮なく入り込み、議論劇に刺激を与えている。

ジャンヌ・ダルク劇の作者にとって、この場の議論を説得力あるものにするのはかなりの困難を伴うはずである。「17歳の女の子を火あぶりにしたいという欲望を合理化することは容易ではない」“for it is not easy to rationalize one’s desire to burn a seventeen-year-old girl”¹²⁾ からである。この場の衝撃の強さは「話し手の論理に対する称賛の思いと彼らが導き出す結論に対する嫌悪感の間に打ち立てられた緊張感」“the tension set up between our admiration of the speaker’s logic, and abhorrence at their conclusion.”¹³⁾ に由来するものである。この場の議論の説得力はショーがもつ技術完成度の高さを証明するのである。

6. ジョウンの自負心

第5場では問題点が浮き彫りになる。ジョウンの強い自負心である。ショーは『聖女ジョウン』の序文において、「18歳のジョウンの自負心は尊大この上ない法王や皇帝以上であった。彼女は自らが神様の全権大使であると認

識していた。”“At eighteen Joan’s pretensions were beyond those of the proudest Pope or the haughtiest emperor. She claimed to the ambassador and plenipotentiary of God,” (15) と記す。ジョウンの生き方について、ホルロイドはショーの見解を次のようにまとめている。

Had Joan escaped burning, she would have ‘fought on until the English were gone’, Shaw believed, ‘and then had to shake the dust of the court off her feet, and retire to Domremy’, seeking fulfillment in a convent.¹⁴⁾

もし、ジョウンが火あぶりを逃れていたなら、イングランド軍が追放されるまで戦っていたら、その後は宮廷から逃げ出し、故郷ドムレミーに帰り、修道院で祈願達成を祈るだろうとショーは考えた。

ショーは、ジョウンが自身の思いを貫く姿勢は宗教者のそれであると認識していた。ジョウンを取り巻く者たちは皆、多少の差はあれ、ジョウンに勇気を吹き込まれ、“positive”な気持ちになれた。しかし、彼女の強い自負心には相当に抵抗感があった。ジョウンが、その目を天に向けて「私にはあなた方より良いお友だち、良い助言があります」“I have better friends and better counsel than yours.” (153) と言い、「あなた方は皆、私が火あぶりになるのを見てお喜びになるでしょう。しかし、私はその火をくぐり抜けてあの人たちの心の中に永遠にとどまることになるでしょう。その時は神様、私をお守りください。」“You will all be glad to see me burnt; if I go through the fire I shall go through it to their hearts for ever and ever. And so, God be with me!” (154) と言葉を残して退場

した後、周りの者たちはその複雑な思いを次のように吐露している。

BLUEBEARD. You know, the woman is quite impossible. I dont dislike her, really; but what are you to do with such a character?

DUNOIS. As God is my judge, if she fell into the Loire I would jump in full armor to fish her out. But if she plays the fool at Compiègne and gets caught, I must leave her to her doom.

LA HIRE. Then you had better chain me up; for I could follow her to hell when the spirit rises in her like that.

THE ARCHBISHOP. She disturbs my judgment too: there is a dangerous power in her outbursts. But the pit is open at her feet; and for good or evil we cannot turn her from it.

CHARLES. If only she would keep quiet, or go home!

They follow her dispiritedly. (154-55)

青髭：どうしようもない女ですな。あの娘のことは実際、嫌いではない。しかし、あの手の女はどのように扱えば良いのでしょうかね。

デュノア：神に誓っていいが、もしあの娘がロワールに落ちたのなら、救い出すためによろい一揃い身に付けたままに川に飛び込んだだろう。だが、もし、コンピエーニュで馬鹿な真似をして捕えられたら、もうあの娘の運命に任せるほかに手はない。

ラ・イール：その時は俺を鎖につないでくれ。あの娘があんな風に生気を取り戻すと、

俺は地獄までついて行きたくなるからな。

大司教：あれは私の判断力まで迷わせる。

あの激しい興奮には危険な力がある。だがあれの足元には奈落の口が開いているのだ。良かれ悪しかれ、あれを引き戻すことはできない。

シャルル：おとなしくしているか、うちに帰ってくれたならなあ。

[皆、意気消沈して、ジョウンの後を追う。]

共存の難しさを語る彼らのせりふには理想と現実の差を知る者たちに特有の哀愁がある。ジョウンがもたらす「勇気」を理解してはいても、現実として、対処することは不可能なのである。

7. 裁判と火刑

第6場では、ジョウンがもたらす「勇気」が果たして本物の勇気であるかどうかという問題が持ち上がる。勇気と見えていたのは実は勇気ではなく、悪魔の扇動ではないのかとの疑念である。生きている人間には真の勇気と悪魔の扇動の区別が難しい。「過去200年、宗教裁判所はこのような悪魔が繰り出す狂気と戦ってきた」“For two hundred years the Holy Office has striven with these diabolical madness;” (165) と査問官は語る。また、その狂気が「自分の判断を教会より上に置き、自分こそが神様のご意志の代弁者と考える思い上がった馬鹿者たち」“ignorant persons setting up their own judgment against the Church, and taking it upon themselves to be the interpreters of God’s will” (165-66) から始まったと主張する。異端は最初は無邪気なものに映るが、最後は人道にもとる恐ろしい悪で終わるとい

ある。査問官はジョウンのような娘の恐ろしさに対して熱弁をふるう。

You are going to see before you a young girl, pious and chaste; for I must tell you, gentlemen, that the things said of her by our English friends are supported by no evidence, whilst there is abundant testimony that her excesses have been excesses of religion and charity and not of worldliness and wantonness. The girl is not one of those whose hard features are the sign of hard hearts, and whose brazen looks and lewd demeanor condemn them before they are accused. The devilish pride that has led her into her present peril has left no mark on her countenance. Strange as it may seem to you, it has even left no mark on her character outside those special matters in which she is proud; so that you will see a diabolical pride and a natural humility seated side by side in the selfsame soul. Therefore be on your guard. God forbid that I should tell you to harden your hearts; for her punishment if we condemn her will be so cruel that we should forfeit our own hope of divine mercy were there one grain of malice against her in our hearts. (166)

あなた方はこれから敬虔で純潔な若い娘を迎えることになる。皆さん、私は申し上げなければならぬ。その娘のことでわれらがイングランドの友人が口にした言葉にはいささかの証拠の裏付けもない。ところが一方、あの娘は俗事と放縦においてやり過ぎだという声はないものの、宗教と博愛においてはやり過ぎだとい

ある。この娘はいかにも残忍な顔立ちが残忍な心を映し出すという類の娘ではないし、その厚かましい表情と下卑た態度から、告発前に有罪の判決をもらいそうな娘でもない。娘を今の危機的状況に追い込んだ悪魔的な傲慢は娘の横顔に何の形跡も残してはいない。皆さんには不思議かもしれないが、娘が誇りにするいくつかの特別な事柄を除いて、娘の性格にすら何の痕跡を残してもいない。その結果、皆さんは悪魔の傲慢と自然の謙譲が同一の魂の中に共存するのを見ることになる。それゆえに警戒していただきたい。冷酷になればと申し上げているのではない。娘の罰として我々が冷酷に判決を下す時、もし我々の心の中に一粒でも悪意のかけらがあれば、我々は神様のご慈悲を失うことになる。

ジョウンが及ぼす影響が啓発ではなく、狂気をもたらすのであれば、世の価値観は混沌となる。「勇気を吹き込む者」と「勇気を吹き込まれる者」が織りなす劇は、実は、この難題を读者・観客に考えさせるための道筋を作り上げていたのである。

ジョウンの火あぶりを目にすると、ストガンバーはすぐに自分の過ちに気付く。「自分は悪人ではない」「I am not a bad man, my lord.」(187) と言っては泣き、「私は自分がしていることがわからなかったのです。すぐにかっと来る馬鹿者です。そのために未来永劫、地獄に落ちることになります。」“I did not know what I was doing. I am a hot-headed fool; and I shall be damned to all eternity for it.”と後悔する。ストガンバーの心境は次のように変わる。

O, God, take away this sight from me! O

Christ, deliver me from this fire that is consuming me! She cried to Thee in the midst of it: Jesus! Jesus! Jesus! She is in Thy bosom; and I am in hell evermore.” (188)

おお、神様、この光景を私から拭い去ってください。おお、救世主キリストよ、この身を焼き尽くす炎からお救いください。娘は炎の中であって御身に向かい、叫び声を上げました。イエス様、イエス様、イエス様と。娘は御身の胸に抱かれ、私は永劫の地獄に。

ストガンバーは「こんなことと知っていれば、(イングランド軍の)兵隊の手から娘を奪い返したのに。」“If I had known, I would have torn her from their hands.” (188) という思いがある。修道士ラドヴニュー Ladvenu はジョウンの最期について次のように語る。すなわち、ジョウンが天を仰ぎ見た絶命の時、「私は天に何もなかったとは信じられません。救世主キリストがこの上なく優しい栄光に包まれて娘の前に現れ給うたと固く信じます」“And I do not believe that the heavens were empty. I firmly believe that her Savior appeared to her then in His tenderest glory.” (189) と表現する。火刑がストガンバーや観衆にいかに大きな影響を与えたかが想像できる描写である。

しかし、『聖女ジョウン』のエピローグ Epilogue において次のような会話がある。火刑から25年後のシャルルの夢に霊が現れるという場面である。

DE STOGUMBER. Well, you see, I did a very cruel thing once because I did not know what cruelty was like. I had not seen it, you know. That is the great thing: you must see it. And then you

are redeemed and saved.

CAUCHON. Were not the sufferings of our Lord Christ enough for you?

DE STOGUMBER. No. Oh no: not at all. I had seen them in pictures, and read of them in books, and been greatly moved by them, as I thought. But it was no use: it was not our Lord that redeemed me, but a young woman whom I saw actually burned to death. It was dreadful: oh, most dreadful. But it saved me. I have been a different man ever since, though a little astray in my wits sometimes.

CAUCHON. Must then a Christ perish in torment in every age to save those that have no imagination? (201-02)

ド・ストガンバー：ええ、かつて私はひどく残酷なことをしてしまいました。残酷ってことがどんなことかわからなかったものですから。それまで見たことがなかったものです。それは本当にすごいもので、あなた方もごらんにならないければなりません。そうしますと罪は償われ、救われもしますよ。

コーション：われらが主キリストの受難だけでは足りなかったと言うのか、おまえには？

ド・ストガンバー：はい、足りません。はい、全然足りません。キリストの受難については絵を見て、本も読み、深く感動していました。いや、そんな風に思っていました。でも、それは何の役にも立ちませんでした。私の罪を償ったのは主キリストではなくて、ひとりの若い女、実際に火あぶりになるのをこの

目で見た女でございます。恐ろしいこととございました。本当に恐ろしいこととございました。しかし、それで私は救われました。それ以来私は違った人間になっています。もっとも時が気がおかしくなることがございますが。

コーション：では、いつの時代にも、想像力の欠けた者たちを救うために主キリストの受難が必要だと言うのか？

確かにストガンバーは本人が言うように悪人ではなく、すべての人間がもつ弱さを備えているに過ぎない。しかし、悪人なら更生も可能だが善人にはどう対処すれば良いのか。数多の善人を教育するために「殉教」をくり返すわけにはいかないのである。

8. おわりに

J. L. ボルヘスは次のように述べている。

彼（ショー）の劇作品の序文は、彼が十八世紀最高の伝統に繋がる、明晰でみごとな散文の書き手であったことを示している。彼独特のユーモアの感覚のために、彼のもつ本質的な真面目さがなおざりにされてきたが、この真面目さこそ現代でもっとも重要な事柄の一つだ。自作の芝居のなかで、ショーは登場人物一人ひとりの行動と倫理を弁明する。ジャンヌ・ダルクを裁く異端尋問官たちでさえ、彼らの立場にしたがえば、その行動は理に適っている¹⁵⁾。

ジョウンが「勇気を吹き込む者」として死力を振り絞っても、「勇気を吹き込まれる者」は簡単には変わらない。ショーの『聖女ジョウン』

では悪人はいないことが深遠な課題を意識させることになる。

エピソードにおいて、ショーは観客にジョウンと天国の関係だけでなく、15世紀と20世紀の関係を意識させた。現代がジョウンの時代にくらべて決して啓発されたものになってはおらず、ジョウンの時代の問題が何も解決されていないことを示したのである。

映画『聖女ジョウン』*Saint Joan* (1957) のオットー・プレミンジャー Otto Preminger 監督は、映画制作中ではなく制作後に、原作の戯曲がジョウン伝説を単純に劇化した作品ではなく、「人間の歴史において宗教が果たす役割の深淵で知的な探求」¹⁶⁾ であると気づくことになった。ショーは「勇気を吹き込む者」と「勇気を吹き込まれる者」の劇を見せながら、実は「勇気を吹き込まれることを拒絶する者」たちの劇を作った。ショー戯曲の懐の深さは侮れないのである。

注

- 1) William Archer to Shaw, 22 June 1921, British Library Add. MSS. 50528, vol21. 引用は Brian Tyson. *The Story of Shaw's Saint Joan* (Kingston and Montreal: McGill-Queen's University Press, 1982), p. 4. から。
- 2) Bernard Shaw. *Saint Joan*. ed., Jean Chothia. (London: Methuen, 2008), Introduction xvii.
- 3) Tyson. *The Story of Shaw's Saint Joan*. p. 122.
- 4) Nicole Coonrad. "Shavian Romance in Saint

Joan." *The Annual of Bernard Shaw Studies* Vol. 29 (Pennsylvania U. P., 2009), p. 104.

- 5) Bernard Shaw. *The Bodley Head Bernard Shaw: Collected Plays with their Prefaces*, vol. 6. ed. Dan H Laurence (London: Bodley Head, 1973). これ以降の *Saint Joan* からの引用はすべてこのテキストからのものである。本文中の引用の後の () 内の数字は頁を表す。なお、本論中の *Saint Joan* の日本語訳については、『バーナード・ショー名作集』(白水社, 1974)「聖女ジョウン」中川龍一・小田島雄志訳と、『福田恒存翻譯全集』第8巻(文藝春秋, 1993)「聖女ジャンヌ・ダルク」を参考にした。
- 6) Tyson. *The Story of Shaw's Saint Joan*. p. 27.
- 7) Michael Holroyd, *Bernard Shaw*. Vol. III 1918-1950 (London: Chatto & Windus, 1991), p. 77.
- 8) Tyson. *The Story of Shaw's Saint Joan*. p. 32.
- 9) Mark Twain. *Personal Recollections of Joan of Arc* (New York: Dover, 2002), p. 162. なお、拙論の日本語訳については、『マーク・トウェインのジャンヌ・ダルク』(角川書店, 1996) 大久保博訳を参考にした。
- 10) Bernard Shaw. *Saint Joan*, ed. Jean Chothia. Introduction xxi.
- 11) Bernard Shaw. *Saint Joan*, ed. Jean Chothia. Introduction xx.
- 12) Tyson. *The Story of Shaw's Saint Joan*. p. 37.
- 13) Ibid.
- 14) Michael Holroyd, *Bernard Shaw*. p. 86.
- 15) J. L. ボルヘス『ボルヘスのイギリス文学講義』(東京: 国書刊行会, 2001), p. 127.
- 16) ギャラリー・マッキー『ジーン・セバーグ』石川一樹訳(東京: 水声社, 2011), p. 66.